

第69回学習会を、平成29年6月9日(金)19:00~20:00 福翔高校にて行いましたので、報告いたします。

第69回の内容 見えないものを見る力

講師 重枝一郎先生

- 1 今の生徒の気質
- 2 アクティブ・ラーニングの考え方
- 3 ロジカルシンキング
- 4 学力向上の「壁」のレベル
- 5 雑感

【演習】

- マラソンランナー



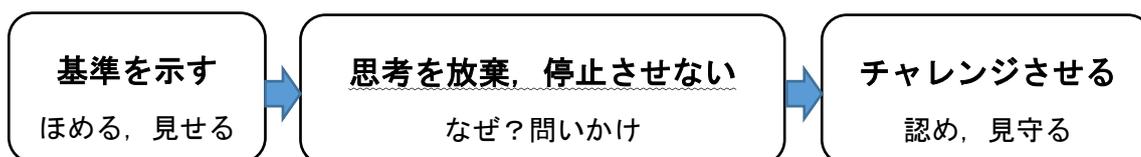
見えないものを見る力 (学力向上の「壁」のレベル)

■今の生徒の気質

- ・静かでおとなしいので態度としては良いように見えるのだが、授業には全くついてきていない。自宅学習の時間がゼロに近いのが問題。
- ・言われたこと以上のことはしない。計画的な勉強をしていない。
- ・言われることしかしない生徒では、いざ受験になったときに学力以上に精神的に持ちこたえることができない。
- ・教師が思考力を育成する場面で、単なる「作業」になってしまうような課題の与え方をしていることが多い。伸びる芽を摘んでしまっているのではないかという推測。

■アクティブ・ラーニングの考え方 (別紙「H28 6・21 教育課程部会」)

- ・正解のない世界にすみ、自分で考え、自分で判断し、他者と協働して行動する。そのような姿勢と能力を育てる教育が求められている。【教科の授業でも、教科外でも】
- ・「論理的思考→自己判断→チャレンジ」の習慣化
- ・「生徒自身がトライ&エラーから学ぶ」(教師の効果的な働きかけ)



- 判断する基準を示しながらも思考を放棄・停止させない指導

- 本気で授業を変える→日常指導を教科指導に取り込む

■ロジカルシンキング（論理的思考）

- ・人を批判するためではなく、自分や自分の周囲をよくするためにある（社会性の育成）
- ・筋道を立てて論理を展開する
- ・「So What?」（だから何？）でつなげていく
- ・すると「理解」のあとに「納得」があるかになる
- ・長いとわかりにくいので「短く、シンプル、もれなく、ダブリなく」なのだが、そこに「分かりやすさ、相手意識（相手の経験・反対の立場を理解）、双方向コミュニケーション」などの伝える力が必要
- ・「三段論法」「ロジックツリー」などの演習

■学力向上の「壁」のレベル（ベネッセ）

（1）偏差値48の壁

この壁を越えるためのポイントは「習得型学習の定着」である。

習得型とは教師が伝達する知識を生徒が摂取する「学び」のことで、具体的な生徒の行動は「宿題を確実にこなす」「先生の話ノートに取れる」などの形であられる。ノートが取れるということは、単に板書を書き写すのではなく、生徒が教師の発する言葉を背景知識と重ね合わせて「意味理解」できている状態である（重ね合わせ的理解）

習得型の学習が定着すると、生徒は「解」として何が求められているのか、また、その日の授業の中でどこに重要なポイントがあったのか、といった判断できるようになる。そして、自分自身が理解できた学習領域と未達の領域を区別できるようになるため、効率的な学びが可能になるのである。

この「習得型学習」を成立させるための必須条件は宿題を確実にこなすなど、何よりも「強制こそ学習」だと生徒が納得することである。

「これをしなさい」と言っても、生徒はその必要性を理解しても、納得するとは限らない。生徒と教師の信頼関係の成立が前提となる。例えば、多くの学校で実践されている「家庭学習の記録」の点検は、有効な手段の一つだろう。弱点克服のアドバイスをしたり、参考書の紹介をするだけでなく、時には褒めたり励ましたりすることで、「先生はいつも自分のことを気にかけてくれている」という思いを生徒に抱かせることができる。「生徒が教師についてくる」状態をつくりだすことが重要である。

（2）偏差値58の壁

この壁を越えるには「習得型学習」に「学習方略」重視の学習方法を加味することが必要である。

もちろん、生徒一人一人にとって有効な学習方略は異なるが、「数学や物理などで問題解法のパターンが使える」「数学は復習、英語は予習に力点を置く」など普遍性の高い方略にシフトしていくことが欠かせない。

もう一つのポイントは「知識の体系化」を行うこと。人間は個々の知識をつなぎ合わせて体系的に思考しているが、そうした思考力を鍛えることで、個々の事象を関連付けて「知識」を使えるレベルに高めることができるようになる。

このレベルでは、すでに生徒は学習習慣がある程度定着し、教師に対して「ついていけば安心」という信頼感を抱いていることが多いので、教師はプロデューサー的な役割に徹することが望ましい。職業研究や学部・学科研究で、学びの目標を書かせたり語らせたりする進路学習は最もポピュラーな方法の一つである。また、偏差値58をクリアできる程度の問題を見繕って生徒に提示する方法も考えられる。いかに教師が裏方に回り、生徒が自律的に学びに向かうための条件を整えることができるかがポイントである。

（3）偏差値68の壁

このレベルにおけるテーマは「方略重視から仮説検証型の学習へ」である。仮説検証とは、自分で仮説を立てそれを検証する学習ができるようになるということ、つまり「自問自答型の学習」を組み込むことである。

ここで重要なのが「メタ認知」（自分の学習活動を客観的に捉え、セルフコントロールする能力）の概念である。（例えば、「何が分かり、何が分かっていないのかが分かる」「高次の学習方法へ修正ができる」など。人間は自分自身で学習方法を修正する能力をもっている。例えば、数学の問題がなかなか解けないときに、今使っている定理とは別の定理が有効であることに気付くことがあるが、これは「メタ認知」が働いている証拠である。もちろん、そのためには背景知識が必要であり、知識の断片を体系化し相互に関連付けて考え、取り出す訓練が必要になる。

こうした能力を鍛える方法はいろいろ実践されているが「ピンポイント学習講座」はその一つだろう。

模試などの結果、ある特定の問題を間違えた生徒だけを集めて、なぜ間違えたのか、どうすれば解けるのかを徹底的に指導する。どのような知識や考え方が要求されているかを徹底的に理解させる。単に答えが合っていればよいということではなく、本質的な考え方を学べば応用力は育まれる。

しかしながら、一斉指導を基本とする授業の中で、個別に対応していくのは限界がある。授業はあくまで学校あるいはクラスの最大公約数の生徒の要求学力に焦点を当てて行い、下位層には課題提出やノート点検を徹底したり、中・上位層に対しては通常の課題に加え発展問題を提示して、添削指導を行ったりするなど、学力層に応じた個別のメニューを拡充していくことが望ましい。

※雑感

■問い方

批判的に吟味する姿勢（解決すべき課題と認識する場合が多い）

肯定的に捉え直す姿勢（よさの継承を意識する）

生徒に影響を与えている「見えないもの」を見つめ、そのよさを捉え直すことから「生徒につけたい力」が見えてくる（私が異動するたびの問い方）

■見えないものを見る力

【清掃】

ゴミが落ちていたら誰かが落としたものとわかる。一方、ゴミが落ちていなかったら、誰かが拾ったと考えるか。「なぜゴミが落ちていないか」という問いは、ゴミを拾ったことのない者には想像できない問いである。人が見ていようが見ていまいが黙々と清掃する体験を通して、想像することが可能になる問いである。生徒に「見えないもの」を見る力をつけてほしい。

【いじめ】

いじめは、当事者はもちろん観衆・傍観者は見える。いじめがない状態は無意識的であり、「なぜいじめが起きないのか」という問いは、人間関係づくりや教室の生活ルール等のよさを捉え直すことができ、意識的にルール・マナー化の約束事をつくることができる。

※いじめの三者の人権の内容

○被害者＝学校で安全に生活し、安心して学ぶことができる安全権と学習権、自己の幸福を追求する権利、被害にあったときは、迅速かつ適切な保護を受け、心理的ケアをうけ、できるだけ早くもとの生活に戻る権利。

○加害者＝自らのいじめ行為の過ちに向き合い、乗り越えて育つ成長発達権と差別排除、暴力依存の意識と行動を修正する学びの権利。

○周囲の生徒＝いじめと人権を学び、仲裁力を獲得し成長発達する権利。

【給付型奨学金制度】

奨学金の制度は見える、自分の人生を構想し実現する力の育成は制度に組み込まれているわけではなく見えない。生徒にキャリア教育の充実（キャリアプランニング能力）、自分の人生を自分の力で切り開いていく力をつけてほしい。

【地毛証明書】

社会で許されないことは、学校でも許されない

社会で許されることでも、学校では許されないことがある

家庭で許されることでも、学校では許されないことがある

人に迷惑をかけないことでも、学校では許されないことがある

※校則は教育目的を達成するために定められた部分社会における自律的な規制として、児童生徒に対して法的規制を及ぼすことができる。

【人権教育】

人権＝幸せになるための＝空気（ないと死ぬ）（とられることもない）

【インクルーシブ教育】

「対等な違い」と「差のある違い」の感じ方

【ほめて育てる】

- ・教師は「認めてあげようと思って、ほめている」「ほめることは、そのまま認めること」という感覚。
- ・年齢が低いとそれでいいかもしれない。
- ・教師の基準や水準で「ほめる」ことが多い。つまり、教師側の基準で一定の水準に達した、超えたと評価するのが「ほめる」という行為になり、逆にそうでない場合は「がんばれ」ということになる。
- ・生徒側からすれば、「認めてもらいたい」「ほめられたい」と思うのは、自分なりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを知ってもらいたいときで、教師の基準とは異なる場合がある。たいてい努力もしていない、自分の功績ではないことを「みなさん・・・」とほめられても、さほどうれしくはなく、励みにもならない。
- ・どうすれば・・・

大切なのは、生徒の実際の行動と向き合うことが基本中の基本。

学習や行事等では、活動する際の目標や工夫する点などを考えさせて教師と共有しておく。そうすることで、単に「よかった」という自尊感情を高めるだけの指導ではなく、自己有用感を高める指導をすることができる。振り返りシートを活用するときも同様である。

解 説

見えないものを見る力（感性）

教室にゴミが落ちているのに気づく教師はたくさんいます。しかし、教室にゴミが落ちていない状況から、誰かが陰ながらゴミを拾っていることに気づくことができる教師は、少ないかもしれません。それを見る力、感性が、教師には必要です。そのことに気づいたときに、いろいろなことが結びついていきます。

高校生の課題

今の高校生は、まじめで素直だけど、依存的で主体性が足りない面があります。そこで、「主体的・対話的で深い学び」＝アクティブ・ラーニングが推進されています。このようなテーマは大枠であり、教師の多様性は保証されることが望まれます。

大切なことは、生徒の思考を停止させないことです。ここが、教師の腕の見せどころです。ITCを使う、話し合いをさせる、教師が語るなど、アクティブ・ラーニングの方法は様々にあります。グループの人数も、場合に応じて様々です。

生徒の思考を停止させないことにこだわれば、アクティブ・ラーニングという言葉だけが一人歩きしない授業改善ができると思います。

過去をリスペクトし、未来に責任をもつ

新しい学校に異動すると、どうしても前の学校と比較してマイナス面をみつけてしまいます。そうすると、前からいる先生達は否定されているような気持ちになります。

そうならないためのスタンスは、「今までの歴史をリスペクトして、未来に責任をもつ」です。慌てずわきまえて、手順を踏むようにします。「過去をリスペクトし、未来に責任をもつ」というスタンスであれば、必ずうまくいきます。

プチ挫折

「挫折を経験させる」ことは、子どもの成長にとって必要です。学校教育の中に意図的に取り入れる方法として、「エントリーシート」を使った職場体験学習があります。「エントリーシート」には、自分が職場体験したい事業所の「志望動機」や自己PRを書かせます。そして、事業所ごとに子どもの人数を割り振るときに、エントリーシートを見て「面接」をし、選びます。1人の事業所に3人の希望者がいれば、選ばれなかった2人は「プチ挫折」を体験することになります。

このような体験は、人を成長させます。学校でしかできないことです。

ペップトーク

ペップトークとは、もともとアメリカでスポーツの試合前にコーチが選手を励ますために行っている激励の言葉です。「P e p」は英語で、元気・活気という意味があります。

教育現場では、子どもを励ますショートスピーチのことです。

例えば、「嘘付くな」ではなく「正直に言おう」

「サボるな」ではなく「しっかりやろう」

「ボケッとするな」ではなく「集中しよう」

「走るな」ではなく「廊下は歩こう」

短く、わかりやすく、肯定的な言葉を使うのがポイントです。

ペップトークが機能するには、前段が必要です。いきなりペップトークをしても、子どもの心に響きません。信頼関係が前提となります。信頼関係を構築するためには、「双方向のコミュニケーション」「ノンバーバル・コミュニケーション」ができなければなりません。その上でのペップトークです。前段抜きでは成り立たないのです。

若い先生へ

大量退職・大量採用の時代です。学校に若い先生が増えています。

ある時、授業がうまくいかないと悩んでいる若い先生に「授業以外で子どもと話をして関係をつくっているか」聞くと、子どもの方から話しかけてくれるのを待っていることがわかりました。その後、進んで自分から子どもに話しかけるようになったら、授業もしやすくなったと驚いていました。

このような当たり前のことも、若い先生には発見なのです。

教師は、「教え教えられる」という関係ではなく、「盗む・盗まれる」という関係です。ベテランの先生の授業や子どもへの声かけを見て、盗んで成長するのです。

子どもは、ほめられてむかついたという反応を示すことがあります。「何も知らないくせに・・・」と内心、思っています。その子どもをよく見て知っていれば、子どもに響く言葉をかけることができます。ほめればよいというものではありません。

生徒感覚と教師感覚が違うことがあります。一生懸命、子どもをほめていると思われぬように、さりげなくすることも教師の技です。

いじめがないときがチャンス

何かが起きてから説教するのは、先生なら誰でもしていることです。何も起きていないときに手を打ち、無意識的なところをルールにしていきます。

インクルーシブ教育というように、今は、「分ける」から「混ぜる」という発想に変化しています。感覚としては、「対等だけ違う」。だからこそ、お互いに学び合い、成長できるという発想です。

いじめがないときがチャンスです。「対等だけ違う」から学び合えるという空気づくりを意図的に行うと、無意識なところがルールとして内在化されていきます。

今回のキーワード

- 「論理的思考→自己判断→チャレンジ」の習慣化
- 生徒自身がトライ&エラーから学ぶ（教師の効果的な働きかけ）
- 基準を示す（ほめる、見せる）→思考を放棄、停止させない（なぜ？問いかけ）→チャレンジさせる（認め、見守る）
- ロジカルシンキング
- 学力向上の「壁」のレベル

♪ 学習会に参加された先生方の感想 ♪ （参加人数 16名）

- ・実践に基づいて大変参考になるお話を聞かせていただきました。学校に戻ってすぐ改善しよう、試してみようと思うことばかりで、月曜日が楽しみです。
 - ・見えないものを見る力＝感性について、最近、自分の感性・感覚が正しいのかどうか、ひとりよがりになっていないかと考えることが多かったので、今日の内容はとても勉強になりました。「なぞのマラソンランナー」を実際に体験して、いかに論理的思考で相手に伝えるのが難しいかを実感することができました。自分はどうしても、生徒に失敗させたくないという思いが強すぎて、いろいろ手を出しすぎてしまうので、エラーから学ばせることも少しずつ経験させるよう、自分が変わらなければと思いました。
 - ・生徒指導があったとき何を話すか、いつも悩みます。生徒が納得できるように話すのは、なかなか難しく、心に響くように話ができればと、いつも言葉を探しています。何を話すかの前に、まずは「信頼関係」というところに、ハッとさせられました。信頼関係をつくることができるよう、日々、意識していきたいです。
 - ・「大きなブレてはいけない軸はしっかりと、しかし、その中に教員（人それぞれ）の多様性を認められている」その雰囲気が好きです。子どもの立場になって、実際に活動すると、初心に戻ることができ助かっています。また、参加したいです。遠いので、なかなか難しいのですが・・・。
- (福岡県以外の先生も参加されています。遠いところからの参加で、その熱意に頭が下がる思いです)
- ・6月という時期で、何となく学年、学級の生徒が落ち着かない状況です。学級で、今日、体験したマラソンランナーをしたいと思います。話すことも大切ですが、活動することでお互いを知り、クラスの輪や絆を深めさせていこうと思います。
 - ・新しいクラス、新しい学校になったとき、信頼関係をつくることが何よりも大事だと感じています。信頼関係を築く方法のひとつとして、ペップトークを知ることができました。体育大会が終わり、いったん目標がされたクラスの雰囲気を維持するために意識的に使っていきたいと思います。
 - ・ペップトークについてのお話を聞きながら、自分は担任として「～するな」という言葉ばかり使っていることに気づかされました。本日、勉強させていただいたので、「こうあってほしい」という想いを伝えていきたいと思います。
 - ・「過去をリスペクトし、未来に責任をもつ」という言葉がとても心に残りました。今年、生徒会の係になり、もうすぐ2年生が引き継ぐことになるので、そのときにこの言葉を伝えたいと思いました。また、教師が先回りをして、生徒が「プチ挫折」する機会を奪ってしまっていた気がします。中学校でしかできない教育活動があるので、それを大切にしていきたいと思います。
 - ・パワーをもらえます。正解のない社会での、自分の拠り所に対する確認になります。「過去をリスペクトし、未来に責任をもつ」この本質に迫ると、見えないものも見えてくるのだろうなど。いつも、ご多用の中、ありがとうございます。感謝です。

(私たちも、参加してくださる方々から多大なるパワーをいただいています。ありがとうございます)